【111】

氏　名（本籍）	清水　遥（島根県）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博甲第 5986 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**Generation of Japanese EFL Readers' Bridging Inferences: The Effects of Text Characteristics and L2 Reading Proficiency** （EFL 読解における橋渡し推論の生成プロセスの検証：テキスト特性と L2 読解熟達度の影響）

主　査	筑波大学教授	博士（言語学）	卯城祐司
副　査	筑波大学教授		磐崎弘貞
副　査	筑波大学教授	Ed.D.（教育学）	平井明代
副　査	神田外語大学大学院言語科学研究科教授	Ph.D.（教育学）	堀場裕紀江

論文の内容の要旨

テキストの読解が成功するためには、読み手は一貫性のある心的表象を構築する必要がある（van Dijk & Kintsch, 1983）。読解は単語認知、統語分析、意味の構築、推論、背景知識の使用など相互に作用しあう様々なプロセスから構成される（Grabe & Stoller, 2002）。この中で、読解中に適切に推論を生成できることは読解の成功に重要な能力の 1 つであるとされ、1970 年代後半から認知心理学、心理言語学、教育心理学などの分野で盛んに研究が行われてきた（e.g., Bransford & Johnson, 1973; Carrell & Eisterhold, 1983; Schank & Abelson, 1977）。1990 年代には、コンストラクショニスト理論（the constructionist theory）、ミニマリスト仮説（the minimalist hypothesis）、ランドスケープモデル（the landscape model）をはじめとして、推論生成についての理論的モデルが数多く提案されている。

しかし、第 1 言語（L1）読解におけるこのような推論研究に比べて、第 2 言語（L2）読解における推論研究は未だに少ないのが現状である（e.g., Collins & Tajika, 1996; Horiba, 2000; Shimizu, M., 2005）。日本の英語教育では、生徒にテキストに明示的に記述されている情報を理解するだけでなく、いわゆる「行間を読む」行為に代表されるテキストの暗示的な情報（e.g., テーマ、筆者の意図）を理解することを求めている。しかしながら、外国語として英語（English as a foreign language; EFL）を学ぶ日本人学習者にとって、テキストを読みながら、このような推論を適切に生成することは難しいとされている。

本論文では、日本人 EFL 学習者の橋渡し推論の生成プロセスについてテキスト要因と学習者要因を考慮して検証することを目的とし、次の 3 点について具体的に検証を行った：(a) 日本人 EFL 学習者の推論生成に影響を与える要因を調査すること、(b) 橋渡し推論が日本人 EFL 学習者の心的表象にどのように統合されているのかを、特に推論と L1/L2 との結びつきの強さの観点から検証すること、(c) 日本人 EFL 学習者がどのように局所的橋渡し推論（local bridging inferences）と大局的橋渡し推論（global bridging inferences）を生成しているのかを明らかにすること。

まず、実験 1 ではテキストの局所的因果関係（causal relatedness）が橋渡し推論の生成に及ぼす影響を検

証した。その結果、(a) 2文間の因果関係が強いほど、読み手は文をより素早く処理し、読解後により多くの情報を再生すること、(b) 習熟度の高いEFL学習者は2文間に因果的なギャップがあるテキストを読む際に橋渡し推論を生成するが、習熟度の低い学習者はほとんど生成しないことが分かった。

次に、実験2、3では、日本人EFL学習者の心的表象における橋渡し推論の符号化について検証した。その結果、(a) 橋渡し推論は日本人EFL学習者の心的表象に明示的なテキスト情報と同程度に強く符号化されていること；(b) EFL学習者、特に習熟度の高い学習者は理解の中で英語の表層的記憶を保持していること；そして、(c) 推論と2言語（L1/L2）の結びつきの強さは異なり、L2の情報を理解する際のL1の介入はL2熟達度の発達とともに徐々に減少することが示唆された。

最後に、実験4においてテキストジャンルとL2熟達度の観点から局所的・大局的橋渡し推論の生成プロセスの検証を行った。結果として、(a) 下位レベル処理の効率性の不足によって、日本人EFL学習者の橋渡し推論のプロセスが安定しないこと；(b) 説明文を読んだ際、習熟度の低い読み手は下位レベル処理により多くの認知資源を割く代わりに上位レベル処理に認知資源を割り当てなくなること（i.e., 下位レベル処理と上位レベル処理のトレードオフが生じている）；そして、(c) 局所的橋渡し推論は下位レベル処理と共起する一方、大局的橋渡し推論は上位レベル処理と共起する傾向が強いことが示された。

4つの実験から、より習熟度の高い読み手はテキストの特性に応じてより柔軟に推論生成を変化させることができ、より多くの認知資源を推論生成に割り当てることができること、また、記憶表象における推論とL2の結びつきの強さは習熟度の低い学習者よりも習熟度の高い学習者の方が強いことが示された。本論文の結果は、L2/EFL特有である2言語（L1/L2）の相互作用の問題を指摘する一方で、L2における推論生成プロセスがL1と同様のプロセスを共有している可能性を示唆した。

審査の結果の要旨

本論文は、「EFL読解における橋渡し推論の生成を調べる」ことによって、EFL読解のプロセスとその問題点を明らかにする目的で行われた心理言語学的手法による実証研究について報告している。緻密な実証研究を通して、未熟な読み手は推論に割り当てる認知資源が限られており、またテキストの特性に応じて生成パターンを変化させる柔軟性に欠けていることを指摘し、上位レベル処理の1つである推論に認知資源を配分できるよう下位レベル処理の効率性を向上させることや、主体的に推論を生成するようになるまでは明示的に推論生成を促す手助けをする必要性があることを示唆した。

第1章では、日本の英語教育、とりわけ中学校から本格的な指導が始まるリーディングにおいて学習者が陥りやすい問題点を指摘し、日本人英語学習者を対象とした「橋渡し推論の生成プロセス」を検証することの重要性を述べている。

第2章では、関連する先行研究を概観している。心的表象の構築および読解プロセスの構成要素を扱った重要論文を挙げた上で、推論の定義、分類、理論について詳細に報告し、推論生成に影響を与える学習者要因・テキスト要因をまとまった形で説明している。

第3～5章では、本研究を構成する3つの実証的研究（Study 1, Study 2, Study 3）が報告され、研究間の関係、および課題との関係も明確で整合性がある。また、全体的に構成や論展開も概ねよく、表記、表や図の提示と言及、参考文献や付表への言及など、丁寧に論文の執筆・作成が行われている。

各実験における課題は次の通りである。

Study 1（実験1に該当）について：本論文ではL2熟達度を主な学習者要因として扱っているが、Study 1において影響が見られなかったワーキングメモリ（WM）容量については今後更に検証を進める必要がある。著者がlimitationとして挙げているように、WMの影響がなかった原因（e.g., テキストの長さ、生成する

必要のあった推論の量）を考慮した追従が必要であろう。

Study 2（実験 2、3 に該当）について：実験 2 の予備実験と本実験ではマテリアルの提示方法に違いがあり、それによって本実験の文脈が予備実験の文脈よりも制約が弱くなり、結果に影響を及ぼした可能性がある。また、実験 2、3 を通して、橋渡し推論の心的表象への符号化をオフライン測定法により検証しているが、英文から活性化された概念がどのように L1, L2 と結びついているのかをオンラインデータにより補足する必要がある。

Study 3（実験 4 に該当）について：大局的橋渡し推論についての先行研究が少ないことを踏まえると、本研究の結果を一般化することは早急であると考えられる。今後、大局的橋渡し推論の生成プロセスについての研究を行い、本研究で得られた結果と照らし合わせ、更に考察を深めていく必要があるであろう。

以上に述べたような課題はあるものの、本論文は全体的によくまとまっており完成度が高く、「橋渡し推論」という特定の種類の推論を通し、第 2 言語読解を解明するための意味のある研究である。

第 6 章では、EFL 読解における橋渡し推論生成プロセスについて 3 つの観点（テキスト特性と L2 読解熟達度の影響、L1/L2 と推論概念の関係性、橋渡し推論のオンライン生成プロセス）から注意深く考察を行っている。L2 reader、特に L2 熟達度の高い学習者が surface memory を記憶の中に保持していたという結果について、共鳴プロセスやバイリンガルの記憶表象の観点から考察するなど理論的根拠に基づいた考察がなされている。教育的示唆についても、本研究の結果とその解釈に基づき具体的な指導法を挙げるなど、L2 リーディング指導における推論指導の必要性を主張している。

本研究の成果は分野の知識向上への高い貢献や読解研究への大きな寄与が期待され、高く評価できるものである。今後は本論文の成果を踏まえ、L1 推論研究で仮定されている生成プロセスに L2 推論生成プロセスをどのように応用できるのかについて検討していくことが望まれる。

平成 24 年 1 月 27 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。